

呼び起こせ、心の奥の常識を

とっとり市報 4月 15 日号特集を読んで (市民より)

4月15日号の市報で「中学生からのメッセージ」を拝見し、この中学生の、また文中の「地べたに座ってお菓子を食べている高校生」の悲痛な叫び声が聞こえたような気がします。

これは決して子どもの問題ではなく、大人の問題だと思います。3歳までに、せめて小学校入学までに親が教えておくべきモラルやマナーが教えられていない現状が、今、子どもたちに表われているのです。

昨日、免許証更新での講習で、こんな話を聞きました。「仕事柄、朝徒歩で通勤中にシートベルトを締めていない人、携帯電話を使用している人がどのくらいいるのか数えながら歩くことがあります。その中で、大変驚くべき光景を目にすることがあります。パンを食べながら、ひげを剃りながら、化粧をしながら運転する人が結構います。珍しいのは歯磨きしながら・・・なんてのも・・・」

子どもに教えるどころか、わたしたち大人も「恥ずかしい」「みっともない」というような気持ちをどこかに忘れてきたような気がします。

<中 略>

赤信号みんなでわたれば怖くない・・・なんてありませんが、1人では、しにくいことと思います。周りの無関心が、そういう行為を助長させてしまうのです。鳥取市民みんなで「モラルやマナー・ルールを大切にする風土(人)」をつくろう!という意識を持ち、まち全体でそういうムードを醸し出すことが大切だと思います。

そういうまちづくりが、結果的に人権問題のみならず観光や環境問題にも波及していくものと思います。

鳥取市教育委員会特別後援

大野靖之コンサート

心のノート

鳥取久松ライオンズクラブ
認証 35 周年記念事業

命の尊さや家族の絆、愛する人への気持ち。
そんな思いを込めて歌います。

と き 8月28日(日)

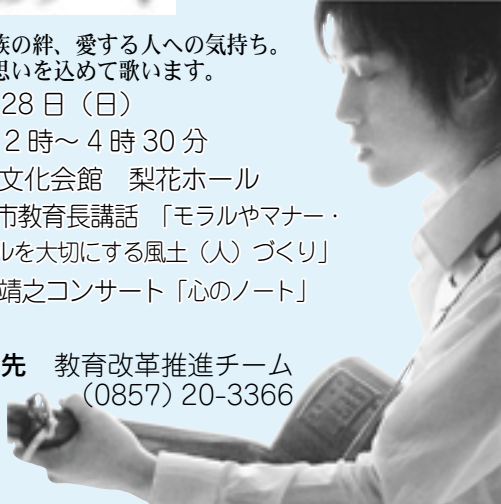
午後2時～4時30分

ところ 県民文化会館 梨花ホール

内容 鳥取市教育長講話 「モラルやマナー・
ルールを大切にする風土(人)づくり」
大野靖之コンサート「心のノート」

入場料 無料

■問い合わせ先 教育改革推進チーム
(0857) 20-3366



モラルやマナー・ルールを大切に する風土(人)づくり

鳥取市教育委員会では、市民のみなさんと一緒に取り組む「モラルやマナー・ルールを大切に
する風土(人)づくり事業」の具体的な展開に向け、市民からの公募委員と教育関係者、PTA関係者、社会教育関係者などの代表からなる推進委員会を組織し協議を行っています。

今回は、とっとり市報 4月 15 日号に掲載した特集について市民から寄せられた意見と、第1回推進委員会での意見を紹介します。

問い合わせ先

教育改革推進チーム ☎ (0857) 20-3366

第1回推進委員会での意見

(幼児教育関係者)

幼児は、親や保護者がつくる環境(空気)の中で影響を受けて育つ。親のペースや生活リズムの中で子どもが育てられる。この環境(空気)を見直してみなければならぬ。

(学校教育関係者)

学校生活の中で、集団の力が個を伸ばしている、個というのは望ましい集団の中で伸びていく、個が伸びれば集団も伸びていく。その中でルールを守るという態度が身についてくる。良い集団を作ることが、個を育てるということにつながる。

(青少年育成団体関係者)

学校をはじめそれぞれの機関が一生懸命に事業をしているのに、なぜこんなに問題が出てくるのかと思う。ただ、家庭、地域など横の連携が薄いのも事実だ。また、大人の目線がこういうことに向いていない。市民の目を子どもに向けていくことが大切である。注意することは難しいが、「大人が見ているな」という意識を子どもに持たせることが、大切である。大人の目線を向けるためにも市民が盛り上がるようなものにしていきたい。

(PTA関係者)

今一番大きな問題は、親の教育力、親の善悪の判断力が揺らいでいるということ。PTAの中でも「親が育たなければ」という話が出てくるが、PTAの研修会や懇談会をしても参加しない親が多い。学校と連携して保護者が意志統一しなければ、子どもを健全に育てることは難しい。また、あまりにも手をかけすぎる親と、もう一方で全く手をかけない親というのがかなり分かれているということも問題点である。

(社会教育関係者)

大人同士のつながりが、この「風土づくり事業」では一番大切である。公民館活動やPTA、子ども会活動など、いろいろな分野で一生懸命やっておられるが、共通した課題がある。それは、参加者の固定化、男の人やお父さんの参加が少ないことだ。もう一つは、指導者・推進者が育っていないことである。大人どうしの人間関係のつながりが希薄になっていることではないか。

(公民館関係者)

大人も変われば子どもも変わると感じている。子どもというのは、いろいろなことをしてもらったのが当たり前になっている。何かをしたらジュースをもらう、何かをしたらご褒美をもらう。そういうものをもらう喜びではなく、認められる喜びを大切にしたい。何かができるときに、自分のやったことがみんなに喜んでもらえたということを体験できるように、できるだけ子どもたちに機会を与えようではないか。